

あつる

Treasure every meeting as it's chance
to happen is only once in a life time.

ストーブ製造の発端

蝦夷地と呼ばれた時代、北海道は極寒の地にもかかわらず、冬の暖房は本州と同じようにコタツや囲炉裏・火鉢などを使っただけのものだった。本州から蝦夷に渡った人々は冬の寒さに耐えられず、亡くなる者も少なくなかったとか…。

そこで日本初の西洋式ストーブが、江戸末期の安政三（一八五〇）年に北海道で試作されることとなる。

製造の発端となったのは、宗谷へ転勤を命じられた箱館奉行所調役下役元締の梨本弥五郎という人物が、「クワヘヒル（オランダ語でストーブのこと）」という火炉が二つあれば有り難く存じ奉り候」と奉行に頼んだことから。奉行はこの頼みを聞き入れさっそく五稜郭の設計で知られる武田斐三郎に製造を命じた。

お手本にしたのは、箱館の港に停泊していた英国船のストーブ。地元の職人にその写真図を見せて見積もらせた。見積額は一台一二両二分余。今の値段に換算すれば百万円にもなるのか。これを二台作ることにした。大きさはと言つと高さ六九センチ、直径四八センチの胴体にお椀型の蓋をしたもので、それほど大きくもなかったが、鋳物製だったため重さがなんと八五キ以上もあった。それに加えて少しでも経費を少なくしようとして煙突を土管にしたため、破損の恐れもあり持ち運びが難しかった。しかも、赴任の時期が近づいた秋になっ

て完成したのがやっとの六台。すでに海は荒くなり、宗谷への輸送は困難になった。

実用ストーブ第一号

箱館にストーブを残したまま妻子と共に宗谷に赴任した梨本は、どうしてもストーブを諦めることができず、任地での製作を決意。格好の人物も見つかった。宗谷で最初に日本への帰化を申し出た景蔵というアイヌ民族の鍛冶職人だ。以前宗谷に駐在していた松前



申し込んでいる。景蔵はこの功により、役所から家を賜るなどかなり優遇されたようだ。

一方、箱館のストーブも奉行の村垣淡路守などが屋敷で使用したようで、彼は安政三年十一月下旬の公務日記に「試みに用ゆ。至って暖か也」と記している。こうして、初の国産ストーブが明治維新の起こる十二年前に北海道の北と南の端で燃え始めた。

開拓時代、入植者にとって辛かったのは厳しい冬の寒さ。冷気が粗末な小屋に容赦なく吹きこんでくる。囲炉裏にどんな薪をくべても、背中から襲ってくる寒気を防ぐことはできない。生きて春を迎えられるのか——そんな思いを抱き、ただじつと冬が過ぎ去るのを待っていた。

開拓使もストーブ奨励

北海道で本格的なストーブの歴史が始まったのは、明治以降開拓が本格化し移住者が増加しだしてから。クワヘヒルからストーブを経てストーブと呼ばれるようになった明治九（一八七六）年、開拓使は火鉢使用禁止のお達しを出した。理由は「炭素の人身に害あるは世の能く知る所なり……其の害蒙るもの少なからず」という一酸化炭素中毒の恐れのため。しかしこの頃はまだ

まだストーブは官庁や学校の需要を満たすのが精一杯。大半の住民にとって新時代の暖房器具はあまりにも高価の花であり、家庭に普及するまでには至っていなかった。

その後、開拓使は一般家庭でのストーブ使用奨励に力を入れる。明治時代のストーブは、ブリキ製の薪ストーブで、燃料の薪は各地で原野を開墾していたため簡単に手に入った。

福祿ストーブ

開拓が進み炭鉱が開発されると、石炭ストーブが使われ始める。石炭ストーブは、ズンドウやタルマストーブの名で官庁関係や学校などを中心に普及した。大正八（一九一九）年には石炭をストーブの胴体部分に貯めておく貯炭式のストーブがドイツから輸入された。しかし、これもたいへん高価だったため家庭用としては普及しなかった。

このドイツ製ストーブに刺激され、値段が安く性能のよい貯炭式ストーブ作りにチャレンジした人物がいた。札幌白石村にあったレンガ工場、鈴木煉化製造場の鈴木豊三郎である。彼はついに大正十四（一九二五）年、初めての国産貯炭式ストーブを完成させ、「福祿ストーブ」と名づけた。このストーブはあつという間に一般家庭に普及した。他の国産メーカーも相次いで貯炭式の製作を開始。この辺りから道民の冬の生活が一変した。今からわずか八十五年前のことである。



川島天洞さん

てんしよ
篆書

篆書は印章に使う文字と言つと一番分かりやすい。篆書が完成したのは、紀元前の二・三百年頃、秦の始皇帝の時代です。あまり正確ではないが、簡単に言えば、この篆書が隸書・楷書のもとになった。その頃、まだ印章はありません。だから記録などには篆書を使っていたんだけど、漢の時代に漢字ができるでしょ。漢字の方が書きやすいから、そちらに変わっていった。しかし、篆書もそのまま残ったんですね。石碑を建てる時、文章は楷書だけれど題字には篆書を使うことが多かった。印章が登場すると、篆書を印章専用の文字として使うようになった。

しよ。簡単な字と難しい字があるでしよ。簡単な字と難しい字を置くとバランスが悪くなる。篆書は線を延ばしたり曲げたりして、バランスを取ることもできる。だから印章に使われるようになったと思う。僕はそんなふうに理解しています。

てんてく
篆刻

篆刻とは簡単に言えば印章を彫ること。印章によって自己表現をする一つの篆刻という芸術に取り組んでいるという意識があります。そのほか大切なことは、僕の基本として仲間をたくさん作りたいという思いもある。書道をやりながら篆刻をやっているのは、定年後の友達作りでもあるわけです。だから僕、飲み会を必ずやります。最近弱くなってひとひ目にあつけれど(笑)。共通の話題ができるし、一緒に

展示会を見に行くといいですね。とも

に勉強するって、やっぱりいいんじゃないですかね。

校長になって定年が見えて来た時に辞めた後何をやるかと考えたたら書道しかなかった。自分の書いたものに押す印章を彫ってもらおうと、義理の母のよく知る越坂柳徳先生の所にお願いに行った。ザックバランなどともいい先生で、その人間性に惚れたのかな。「僕も彫れますか」「彫れますよ」ということになって、それから篆刻を始めました。だから僕の篆刻の最初は雅印です。それからずっと「天洞、天洞」と雅印ばかりを彫ったので、今では雅印が引き出しにいっぱいあります。NHKの文化教室に一カ月に二回通つ

Dilettante 悠々人語録

篆書とは？ 篆刻とは？ 自ら漢詩や慣用語を集めた名句集を作り、そこから言葉を選んで篆刻を作成するという川島天洞さん。今回の悠々人語録は、篆刻の魅力について。北海道篆刻協会会員の書家、川島天洞さんが語ります。

て、月に一本ぐらいのペースで出来上がるかな。NHKに行ったのは、僕が定年で辞める前、五十六、七歳ぐらいの時。随分長い年月が経ったので、かなりたくさんあります。

篆刻作品ができるまで

篆刻には、好きな語句や成語を彫る遊印や、川島正彬と自分の名を押す姓名印、天洞という雅号の雅印、その他、書作品の右上に押す引首印など、いろいろあるんですよ。

初めての人は自分の名前を彫ることから始めます。

まず石材を買つてしよ。書道用品専門店には大体売っています。

普通、展示会に出すのは七・五センチの石も。石も寿山石とか青田石とかいろいろ種類がありますが、一番彫りやすいのが青田石。それを買って来て、普通、漢詩から選んだり、慣用語から選んだり、有名な語句から選んだりした四字とか五字の文章を、漢語集や字典を参考にしながら篆書に変えます。

今度はその篆書を四角い判の中にどうやって収めようかと、印章の原稿に印稿づくりをやるわけです。形を変えたり、線を延ばしたりして書くんですね。書いたものを先生の所に持って行って直してもらいます。直してももらったものを今度は雁皮紙に書き取ります。それを右にペタンと貼る。そうすると字が反対になるでしょ。それを写して彫るわけです。彫ったものを先生の所へ持って行くと、先生がもう一

度手を入れてくれます。字になっていない箇所とか、どうしても必要な箇所を印刀で直してくれる。それで出来上がり。

北海道篆刻協会

いま柳徳先生が亡くなったので御子息の久雄先生に教えてもらっています。その時に、僕のように柳徳先生の時代から習っていてNHK教室に十年以上もいる古い連中が呼び掛けて、以前の協会を引き継いで、新しく篆刻協会を創った。

毎年、協会展を開催し、昨年から道新ギャラリーでやっています。新しく出品作品の中からみんな選ぶ協会の賞を設けたんです。毎日新聞や道新から賞状をもらって、これは楽しいとかいいというものをみんなの投票で選び懇親会の時に表彰する。こんなふうに会員が、楽しく参加できるようにやっていくことが協会を広げるベースになるでしょう。実は去年、最初なので僕が賞状書いたんだけど、自分で賞をもらっちゃってね(笑)。

ともかく、多くの新しい会員がどんどん増えることが、今一番の願いです。

川島 天洞(正彬)

かわしま てんどう(まさよし)

元清田平岸高校校長。北海道篆刻協会会員、北海道書道展実行委員会、北海道書道展教員時代から書道を学び、北海道書道展出品、数度の受賞を受け会友になる。自ら作品の落款印を制作するため篆刻を学ぶ。故越坂柳徳先生に師事、その後越坂久雄先生から指導を受ける。毎日書道展に出品、入選を重ねる。

読者を拒んだ無名の作家

孤独な奇書目録



美術作品や著述のような創作物というものは本来、他人に何かを伝える、あるいは見てもうするためのものといえよう。ところが、この世には読者や鑑賞者を拒んだかのような大作もあるのだ。

アメリカの謎の作家ヘンリー・ダーガがそれにあたる。彼は一八九二年まだ二十世紀になっていない時代、イリノイ州シカゴに生まれた。四歳のとき母親を亡くし、八歳のとき父親の病気で児童施設に収容された。他人との交流感情が普通とは異なっていたため、知的障害と誤診されそのような施設に移されてしまった。

十七歳になった彼は施設を脱走し徒歩でシカゴまで戻り、病院の皿洗いや掃除で生計を立て、日曜日の教会のミサには欠かさず出席しながらアパートで貧しい一人暮らしを続けた。八十一歳で死ぬまで、ほとんど人付き合いをしなかった彼の死後、だれも入ったことのなかった部屋に信じられないような物が残されていたのだ。

『非現実の王国』という表題の物語と画集だった。それは、タイプで打った一万五千ページ、十五巻からなる壮大なストーリーで、さらにそのための三冊の大きな挿絵画集が付

けられていた。中には三メートル以上もある巨大な絵もあったという。内容がまたすごい。一種の猟奇ファンタジーともいえるべきもので、ふたつの宗教国家と非宗教国家の四年七月にわたる戦争物語である。非宗教国家の軍隊による、特に子供への考えつく限りのあらゆる嗜虐的な残虐行為が描かれており、そのおぞましい描写においては、猟奇趣味的なスプラッター作品ともいえる。

評論家や研究者によつては、ヘンリー・ダーガが毎週、教会へ通うような人間だったことから、世界の理不尽さに対する、彼自身の神への問いかけなのだ、というような考察もあるようだが、自身で絵物語を描くことを趣味とする著者としては、どう理屈をつけようと、これは彼が夢想する性向の発露にほかならないと思ってしまう。

画風としてはむしろ、淡泊な線画調ではあるが、その克明な残酷描写は物語のテーマを越えている。たとえば絵を描く人間は、ときとして椅子一個を描きたいがために、部屋全体を描くことになってしまつということが珍しくない。同じようにヘンリー・ダーガにとつては、その嗜虐趣味に、よりリアリティを持たせた

いがための一万五千ページの物語と三冊もの画集が必要だったという方が考えやすい。いづれにしても一九三七年に亡くなるまで、だれひとりとして彼の大作を知る者はいなかったのである。まさにこの壮大な私本は読者を拒否するよつに綴られた。作者が亡くなった今は、彼のこの作品で意図したことは推測するしかない。

何年かまえ東京の美術館でも『ヘンリー・ダーガ展』が開催されているし画集も出版されている。

もし興味のある方は、まずはインターネットでもご検索いただければと思うが、それ相応のご覚悟を。

BOOK INFORMATION

一冊気になる 超書紹介

「ウルトラソフビ超図鑑」

株式会社ワールドフォトプレス

定価一、六〇〇円

(税込)

二〇一〇年七月

発行



タイトルの「ソフビ」とはソフトビニールの略で、PVCや塩ビ（共にポリ塩化ビニールの略）と言われるものである。ここで紹介されている製品は、素材は同じだが、スラッシュ成型（一方向に湯口を空けて、中空状態で成型されたもの）によって製造されている。

そしてもう一つ。この本の装幀が素晴らしい。本文紙には微塗工紙（塗工紙とはコーティングされた紙のこと）を使用し、発色を重視しつつも紙の持つ手触り、風合いを重視したところが嬉しい。そして子どもを持つ身としては、防水性のある表紙の「マットPP加工」に感謝したい。

ウルトラQの放映開始当時（一九六六年）からソフビを製造販売していたマルサン（後にマルザンに社名変更）からソフビを引き継いだブルマック、ポピー、そして現在のバンダイへと至る時代ごとの紹介が詳しい。全製品を写真図版入りで掲載し、型の種類や塗装の変更などがわかるように解説している。

また、数々の円谷作品で音楽を担当した作曲家の冬木透をはじめ、脚本家、美術デザイナーなど「ものづくり」にこだわったクリエイターへのインタビュー記事が、随所に散りばめられ楽しませてくれる。

「フビ」である。主に神社での骨董市、市内の骨董品店、リサイクルショップでの「フィールドワーク」でサンプルを採集し、検証をしていた。この研究を始め6ヶ月が経過した頃、「研究費」が突然差し止められた。[番組に登場するキャラクターを商品化することで収入を得る、マーチャンダイジングの創世期の歴史を息子とスタディしている。]との大義名分は残念ながら女性には通じなかった。

(K・U)

北海道の同人誌

人間像



合評記録は内報誌「同人通信」で連載させた。合評会もそれなりに厳しい場であった。

最盛期 七〇号〜九五号くらいを

我々は発情期と呼んだ。四日市の瀬田栄之助が「スペイン革命」を書いて、スペイン女王勲章を受け、朽木寒三の「馬賊戦記」が徳間書店のロングベストセラーになり、平木國夫の「空気の階段を登れ」が大宅荘一賞の候補に挙げられた。その後彼は全国の新聞に民間航空士の生きざまを連載。戦前芥川賞候補だった古宇伸太郎が「漂流」、道新論説委員だった千田三四郎の一連の作品、津田さち子、丸本明子が次々と作品集を出し、注目されるようになった。また、連続して五人ほど、NHKの「私の本棚」で作品の朗読が放送される。

現況 十年前、主柱の針山和美が急逝

し、注目されるようになった。また、連続して五人ほど、NHKの「私の本棚」で作品の朗読が放送される。数以上が退会、残った者が続刊を強く求め、主宰に福島昭午を指名した。いわば第二次「人間像」としての出發であった。資金難から、季刊を年一号とせざるを得ない。加えて、残った同人は高齢病弱。そう長くは続けられないと思われた。そこへ、葛西庸三が復帰し、根保孝栄が新たに加わり、彼の紹介で誌友、同人の加入があり、和木亮子、北村くに子、笹原実穂子ら才女たちが意欲溢れた作品を発表するようになった。村上英治の奮起もあって、にわかに活気づいたと言えようか。特に根保の「同人雑誌評」は全国的に高い評価を得ている。ゆえに、こうなっ

勃興期 針山を核として、投稿者たちがそれぞれ自分の知っている書き手たちを勧誘して同人の数を増やしていったのが二〇号辺りからであった。九州・四国・大阪・神戸は関西支部、東京・横浜・千葉は関東支部とし、北海道に本部を置き、それぞれに合評会を開いた。したがって、郷土に密着した雑誌とは言えなかった。

たら、「九十路」まで続けてやろうじゃないか、と聞き直っている昨今である。現在の同人数十名、誌友数八名。目下一八一号原稿待ちの現況。

(人間像 福島昭午)

コブタン



「コブタン」が創刊されたのは昭和五十二年(一九七七)正月である。

創刊の趣旨は世故に煩わされることなく書きたいことを書くということにあった。その趣旨を発刊宣言にかえて、創刊号「あとがき」でこう書いた。

「何故書くか。いろいろな人がいろいろなことを語っている。が、煎じ詰めれば書きたいことがあるから書く、ということに尽きるようである。いいモノを書きたい、ペンを執る者なら誰もそう思う。しかし、そう思うことよりも、書きたいモノを生活の厳しいかわり合いの中で見つけるといふことの方が大事ではないか。」

誌名を「コブタン」としたのは叩かれて大きくなくて行くという願いからである。

創刊号は当初の計画では三編載せる予定であったが、作者の都合で拙稿一編となり、私の単独発刊となったが、号を重ねるにつれ寄稿者が増え、現在まで寄稿

された方は二十五名になっている。因みに、コブタンは会員制をとっていない。寄稿者は不特定多数で、門戸を万人に開放している。但し、寄稿された場合は作品の頁数に見合っただけのコブタンを買い上げて頂いている。作品は文学のジャンルのみならず、研究論文・対話、対談(座談会)・時事評論・ルポルタージュ等々多岐に渡っている。

中でも多かったのはアイヌ関係作品である。主な作品を拾ってみると、亡びゆき一人となるも(小説)、人種の偏見(論文)、シシリムカ(詩)、鳩沢佐美夫が主宰した日高文学協会のなりたちについて(某大学卒業論文)、あなたの優しい翼の中で(小説)。「怨念の彼方」に改稿して、第三〇回部落解放文学賞佳作受賞、アイヌの血がさわぐー沙流川総合開発の矛盾をつく(座談会)、鳩沢におけるアイヌの性質(論文)、書きたし、吾が民族のために(評伝)、遼星北斗と鳩沢佐美夫(論文)、鳩沢佐美夫がかかわった三つの同人誌(評論)、近代アイヌ文学へのアプローチ(評論)、近代アイヌ文学とキリスト教(評論)、ヌブルサル(詩)、武隈徳三郎とその周辺(評論)。他に、「特集・鳩沢佐美夫」I、II、III、IVの四号を出している。この中で、特に好評を博したのは、鳩沢佐美夫と札幌東高等学校歴史学研究同好会生徒との対談、「語りたし、吾が民族のために」である。

因みに、当誌は昭和五十五年六月、クオリティ「北海道文学賞奨励賞」を受賞している。(コブタン 須貝光夫)



■編集部から 「方寸の芸術」数センチ角の石の印面のなかに無限に広がる宇宙を宿すといわれる篆刻芸術。書画へのサインの役割を果たす落款印から「華麗なる従者」とも言われている。川島天洞さんは自分の書作品に自ら雅号を篆書で書き、彫った雅印を押したいとのことで始められた篆刻。従者に留まらず篆刻芸術に魅せられて作品を彫る。最近では手紙を書くことが少なくなってきた。メールで簡単に文章を送ってしまう。礼状もメールで失礼することももある。手紙の署名の横に朱色の印は、パソコン印刷文、乱筆文も引き立ててくれる。自分で彫った印であれば格別である。



●発行・編集／中西出版あうる編集部
〒007-0823 札幌市東区東雁来3条1丁目1-34
TEL (011) 785-0737 FAX (011) 781-7516
URL: <http://nakanishi-shuppan.co.jp/m>
E-mail: owl@nakanishi-shuppan.co.jp

●発行責任者／林下英二

●発行日／2011年2月8日 ●デザイン／上野修一



ホームページへアクセス!